



TITLE:

雑報

AUTHOR(S):

CITATION:

雑報. 地球 1933, 19(5): 407-414

ISSUE DATE:

1933-05-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184161>

RIGHT:

にあつては極めて稀に顯微鏡的に知られるに過ぎない種類までも最新の資料を參考して産狀產地等を記載してあることは今まで出版された類書に見ない特徴である。高等學校程度の學生の好參考書であり又一般鑛物愛好家の坐右に備へて鑛物學の常識を得るに好適である。(ハル)

○革命の印度

印度志士ボース著 東京木星社發行
定價一圓四十錢

四六版四百二十八頁、略綴の中冊子である、印度の民心がいかに反英的であるかを解せんとする人には、絶好の良參考である。(藤田)

○略圖練習二百題

香川幹一著 古今書院發行
定價一圓二十錢

地理教授に際し塗板の上に簡單な略圖をさらさらとかいて説明するといふことは氣持のよいものであり、教授者のためにも被教授者のためにも都合のよいことであるが、香川君のこの小冊子は、さうした教授者に與へるよき參考であらう。(藤田)

○日本郷土景觀通説

耕崎正男著 古今書院發行
定價一圓二十錢

四六版一七〇頁の小冊子ではあるが、日本郷土の各地方を細別して地區別に景觀を記したものである、著者の眞摯な態度を喜んで推奨する。(藤田)

○新地理教授法

中島東次著 東京有文館發行

定價一圓五十錢

四六版二百二十六頁の小冊子である、地理學の發達、人文地理科の文化概念、地理教授法の三篇から成立し第四篇に地理教授の實際といふ章を設けて實例によつて説明が加へられてゐる、最後に尋常小學地理書の取扱といふ附録がある。(藤田)

雜報

○廣島の縫針

縫針は廣島縣下の特産で、他に内國品の競争がない、これを製造する所は

飛馬印 廣島市田村工業株式會社

萬年青印 同中田太一工場

平和印 岡山本工場

美人船印 同中田傳次郎工場

漢大利印 同青木瀧次郎工場

などが主なもので、飛馬印が最優であつて、昭和六年漢口に輸入された丈でも約四億本、二十萬海關兩に達した、競争者はドイツのハンタリーであるが、日下の割合は日本品九割ドイツ一割である、ドイツ品は日本品と品質に於て優劣がないけれども、ハンタリーなどは日本品の四倍の値段である、其他は日本品よりも遙に劣等で、値段は二倍であるから、ここで日本品がきざれば縫針では覇となへられる、不幸にし

て日本人は日先で格外な安値に應じ品質をさげる缺點があるから、自重してほしいと云はれてゐる。

○支那へ陶器の輸入

支那は世界で陶器の本場であり江西省景德鎮が中心であるけれども近年は品質粗悪且薄手物多く、流行に後くれがちで轉寫紙本金等を日本から供給をうける状況に退歩したので、今日では日本陶器に對して相撲がとれなくなつた、本邦品の中で需要最も多きは手附湯呑茶碗急須、肉皿、スープ皿、小皿、皿付コーヒ茶碗、牛乳入、建築用タイル等で花瓶、便器、洗面器これにつぐ、其品質といひ體裁といひ斷然支那産を壓倒するから大衆向に適し輸入外國品の七割に達し、漢口だけでも年額十萬兩をこえてゐる、一國の政治が衰へると歴史を誇つた陶器さへ墮落するのである、獨り陶器のみではない、絹織物のごときも、日本品と競争が出来ぬやうになつてゐるのである。

○滿洲國に於ける歐米人

一、滿洲に於ける英人の代表たる奉天在留の英商は事變以來不振である、それは主として機械、銅、鐵、汽車、自動車等を取扱ふもので舊軍閥に關係が深かつた結果で、目下その掛金がとれない事狀である、しかし七年十月以後、奉山滿海鐵道から注文が出だしたのでやゝ愁眉を開いた、石油公司はソヴェエツトの石油侵出で打撃をうけてゐる、最近二十萬圓で建築した香上銀行支店が、奉天に完成したから、これから預金と貸出をやるであらう。二、米國の商社は奉天に七つ、その中自動車販賣をやる外の會社

は事變のために何れも大打撃をうけたから賣上が六割以上減退した、しかし事變以後日本人の國產愛用が盛になつたので日本品と競争のない自動車と石油の外は前途悲觀である、ハルビンには米人の阿什河製糖工場があり、又製粉業をなす松花江火磨といふのがあるが、これは最近に紐育ナシヨナル、シチーバンクの直系の會社に買はれて活動をはじめてゐる、北滿の開発につれて米國商人は農具賣込など前途を見込んでゐるらしい。三、フランスの奉天の商社も舊來軍閥と關係してゐたので、事變以後一頓挫をうけたが、近頃徐々に注文をうけてゐる、機械、銅、鐵、火藥の類の取引である、北滿に於てはロシヤ銀行家代表メツセをして調査せしめてゐる。四、ドイツも亦軍閥相手の商人が奉天に居たが、事變で打撃をうけた、藥品や醫療器械を取扱ふ方の商人も多いが、一時弱はつてゐたけれども、近頃醫院が復活し各鐵道からの注文が出だしたので活氣づいてきた。五、チュエツコスロバキヤの代表シュコダ商會は機關車、汽車、各種機械類を取扱ふてゐたが一時大打撃をうけたけれども、事變後弗々取引が始まりかけたハルビンのシュコダ造船所も同様で、新滿洲國が確立したので、大に前途を見込でゐる。六、ロシヤは奉天にて石油を販賣するために代理店をおき、英米の石油よりもすべて安價にうるために大に活氣がついてゐる、將來は北滿に於ても大に活動する氣配が見える。

○新鮮牡蠣の飛行送付

米國ニューヨークレアンスは結

来しないので冬期花卉の類は、すべて飛行便でシカゴへ供給されてゐたが、今度は名産の牡蠣を生のままで飛行送りをする事になつた、それは牡蠣をエヤータイトの罐につめ、特別製の輕量容器にいれドライアイスで冷蔵して送くる。ニューヨークレアンスを午前八時に出發すると午後五時十三分、シカゴにつく、其間メンフキス、セントルキスの二ヶ飛行場を通る、やがて新鮮な鰯も冷蔵飛行をするといふことで、荷が飛行場につくと、直にスペシヤルトラックでホテルやレストランに送くるので、メキシコ灣で朝とれたものがシカゴ其他の内陸都市の夜餐に供せられるといふ、輸送量は一時に約十ガロンである、飛行機は今や軍事のみでなく、商業上に大關係が出来だした、現に京都から新京へ、絹の仕立物などは飛行便で送られる、商人も飛んでゆく、とても汽車や汽船では遅くてたまらぬとは、川勝高島屋支配人の直話である。

○東印度市場に於ける東洋

關領東印度に於ける日本其他東洋諸國の進出に關し、昨年十二月デリー・テレグラフにバタヴィア通信といふのが出た、曰く日本人東印度市場に於ける歐洲産綿製品を驅逐すとは、既に一九二三四年の頃やかましくいはれたが此勢は年と共に増進し、其輸入の割合は年と共に増加し、東印度輸入全體の半以上になつた、東洋進出の犠牲は獨りオランダのみではなく、英國にも及んだ、從來莫大な綿製品を關領東インドに供給してゐたランカシアもオランダのツエンテ同様に段々と輸入が減少した、ことに最

近は東インドに住む歐洲輸入業者も背に腹はかへられぬから大抵日本に仕入所を設けて、日本から莫大な日本製品を輸入して暮してゐる、瘦我慢を張つて日本品を取扱はないと云ふことは、自ら墓穴をほるに等しいからである、かうした傾向は第一に世界的不景氣のため誰しもが廉い品物をのみ買ふ結果であり、第二に日本貨の暴落の爲に、日本品が安價であるからである、オランダ人は國家觀念が強いから日本品を使はずビール等全然和蘭品を用ひてゐるけれども、オランダに利害のない土人は、オランダ品と優秀のない日本品を非常に安く手に入れうるのであるから、誰もオランダ品を相手にしない土人は其必要とするサロンを日本品ならば、ツエンテ製品に拂う三分一で入手できるから、オランダ品は賣れないのが當然である、さうしてこれは日本政府の輸出獎勵費の交付でダンピングをするのだと疑つたが、神戸駐在のオランダ領事から、決して左様なことはないと云つてきた、そこで特惠關稅を設けたいのだが、もしやれば國際的に困難が發生するので出来ない、オランダ人自ら自國工業を東インドでやればよいかと云ふと、それでも日本品には打勝ち得ないといふのである、これはオランダ祖國にとつて悲慘にして、且恐惶的であるが僞らざる事實だといつてゐる。

○東アフリカ事情

東アフリカは久しく暗黒大陸として残つたが、東アフリカの開發はアラビヤ人の手にはじまり十五世紀にバスコデガマがアフリカ廻航の當時は既にアラブ族

が東アフリカに入つて、沿岸一帯に奴隸を使役して穀類や椰子等を栽培してゐたが、ポルトガルが印度のゴアによつて、途中のモンバザに城をつくり勢力を扶植したので、一時はよかつたが、失政のために葡人が弱はつたと同時に、アラビア人は勢力をもちかへし一六九八年には、モンバザを包圍陥落し、完全に東アフリカから葡人を追つた、しかしアラブの力は間もなく衰へた處、十九世の初頭に於て、スタンリー及びビングストンが(一八六五年)探検した結果、西洋諸國はこの方面に注目しはじめ、やがてスエズが開通して一八七三年には印度ザンジバル汽船會社が歐洲へ定期航路をひらき、愈々英國へ東アフリカが結合しはじめた、其頃ドイツ人カールピーターはタンガニイカを探検し獨斷で各地の酋長と條約を結んでかへり、そこに獨逸勢力を植えると同時に、フランスはナイルから上つて排英をやりだしたので、一八九四年、英國はウガンダ王と條約を結んで機先を制した、一八八五—一八九〇年の間に英獨佛の協商ができ各國殖民政府は自領開發に力を注ぎ、まづ英國はモンバサからケンヤウガンダ鐵道をつけ、ドイツはダレサラムから中央鐵道をつけたので東阿は面目を新にしはじめた、大戰の後獨逸の領土は英國に委任され今日では東アフリカの大部分は英領に歸してゐる。

東アフリカの地勢は大體沿岸地帯、中部高原地帯及湖岸地帯の三地理區から成立し河川は中央に出て、一は印度洋に、一は沼湖に入るそれがナイルの源である、沿岸は大體海抜三

千呎以上の低地であるが灌水の方法がない、大部分は藪や雜木のステップである、高原地は海抜一萬九千七百二十呎のキリマンジャロ山及ケンヤ山のある土地で海抜三千呎から九千呎に達し農牧に適する廣大な地域をしめる。湖岸地帯は世界第二の大湖ヴィクトリア(面積二萬六千八百二十八平方哩)の沿岸で、海抜三千七百二十六呎の高度を保ち、棉及甘藷の栽培に適し世界有數の棉産地になつてゐる。氣候は四季の變化がないが、高度でかはる、沿岸と湖岸は頗る暑く日蔭でも平均八十度を下らないが高原地は五十八度乃至六十五度で非常に涼しい。

東アフリカ三領地の面積はケンヤ二十二萬平方哩、ウガンダ九萬四千平方哩、タンガニイカ三十六萬六千平方哩で計六十八萬五千平方哩、英領印度の三分二、

人口はケンヤ三百萬、ウガンダ三百五十萬、タンガニイカ四百九十萬、合計一千四百四十萬で、朝鮮の半分しかゐない、その人口の大部分は土人で一千三百萬人に達し、其他はインド人アラビヤ人で歐洲人は二萬五千にすぎない、面積の割に人口が少いから折角の沃地も可惜開拓の力が及ばないで、日本の正反對である。

土人は種類が多いが、昔は奴隸に賣られたもので、北米のニグロはこの地のものと血縁である、しかし北米では賣られた御蔭で賢明になつたが、この地のものは昔のまゝに野獸的生活をしてゐるに止まる、土人の代表的のものはバンツと

アラブの混血せるスワヒリと、ウガンダのマガンダ族で、言語はスワヒリ語が通用最も廣い、しかし彼等は怠惰で遅鈍でお金のある間は怠ける民族である、しかし近頃警澤になつて昔の裸體から着衣にうつり、白壁の塗板壁に寢臺を置き、米や肉を常食とするものが増加してきた、男は木綿のシャツに猿又、女はシュールカスといふ派手な模様の綿布をまとう、ウガンダの方でも土人の生活は進み洋服をきて自動車を行くものさへ出来てきた、しかし大多數は玉蜀黍やバナ、を常食とし掘立小屋に住む處の低級者である。殊に奥地には眞裸のものも少くない、そこで近來日本から土人への被服が供給され、一千万の土人の被服となる綿布の三分一以上は日本品である、目下英、蘭について第三位であるが、土人が日本品をすくから第二位にはなるのに遠くはなからうといはれてゐる。都市で注目すべきはモンバサ、ナイロビ（人口五萬ケンヤの首府）キスム（湖上交通の中心）、エンテベ（ウガンダの首府）カムバラ（棉の中心市場）、デンヂヤ、ダレサラム（タングニカの首府人口二萬）モン、（健康地）ムワンザ、ブコバ等である、在留日本人は目下五十四人にすぎず、多くはモンバサに止まつてゐる。

○咸南山地帯の亞麻と薄荷栽培

本邦製麻界の大宗

帝國製麻が垂延して措かぬ咸南の亞麻栽培地は、長津郡新南面下碕里、海拔三千五百五十尺の高臺、片麻岩を母岩とする沖積土の砂質壤土に、石礫を混じた瘠肥中位の試作地で、二

箇年試作の結果によれば、最高六百六十六斤、最低三百八十九斤、平均五百二十七斤の收量あり、これを歐洲の先進地たる北フランスの九百二十斤、ベルギーの八百五十斤に比すれば、著しい遜色を免かれぬが、北海道の四百二十斤に比すれば、遙に優秀の成績を示し、大面積栽培の場合といへども、四百斤以下に低下する憂はないものと見られてゐる。しかも同方面一帯の高地帯の特殊作物たる馬鈴薯が、亞麻の前作として最適であり、その後作は燕麥又は蕎麥等を適當とする點に於て栽培作物の種類・數量に限定され勝な同地方としては特に輪作法攻究上有利なものである。

次に咸南山地帯農家の好副業として將來を賜望せらるゝものに薄荷栽培がある。從來元山薄荷は、文化の進展に伴ひ、その需要を累進し、醫藥・香料・工業用・化粧料等、極めて廣き用途を有し、好況時代には輸出額千八百萬圓に達したが、現在は六七百萬圓程度に減退してゐる。

薄荷は本邦各地に栽培されてゐるが、氣候の影響する處大なるため、北海道北見國野付牛附近から遠輕附近を主産地として世界總産額の約八割を占めてゐるが、咸南山地帯は氣候概ね北海道に類似し、且つ廣面積の耕地を有して、その栽培に適するのみならず、又、製品は容積が小さいので、交通不便な山地帯としては、最適の作物と見られ、單に原料栽培のみならず、農家の副業として、莖葉を蒸溜し取卸薄荷とし更に進んで工場設備による精製二種に進み、薄荷腦及び薄荷

油に仕上げて移輸出品とすれば一層、有利な結果を招來するものとして、大に期待をかけられてゐる。(朝鮮所載)

○會寧・羅津間の新道路計畫

咸鏡北道に於ては、總督府の北鮮開拓計畫により江岸道路の修築とは別箇に會寧・羅津間の新路線を計畫しつゝある。同路線は既に賦役に用ゐられて會寧より六里の地點細谷洞までは二等道路並の道路が出来上つてをり、途中細谷嶺が險阻のために、從來往來二日を要したものが、これによつて一日往復となり、木炭その他の物資の會寧から搬出が盛んに行はれるに至つた。

尙同路線は更に鹿野・鐵柱の諸地を経て、雄基を通り羅津に通ずるもので、全長十八里、自動車では三時間を要するに過ぎぬ、會寧の凱旋橋を通過するものとすれば、龍井・羅津間五時間で駛走し得るわけである。目下のところ八、九兩年度繼續の時局事業として目論まれ、極めて重要視されてゐる。

○全羅南道の硫酸礬土

全羅南道の硫酸礬土は、果して充分の成算の下にアルミニウム金屬の原料として化學工業化し得るか否か、目下内鮮兩地に於て試験中である。最も注目すべきは、多大の埋藏量を有する木浦附近の玉埋山のもので、今一つは同じく、木浦沖の加沙島の明礬とである。前者

○享保以後の地理關係出版書目 大阪(七)

天保 大阪之圖 一枚摺 開板發行中出

は住友によつて、後者は朝鮮窒素會社長野口氏によつて、何れも研究中であつて、今やアルミニウムの劃期的時代を現出せんとしてゐる。

○朝鮮の鹽田擴張五箇年計畫

八年度以降五箇年繼續で總額二百十萬圓の經費を承認された鹽田擴張は、同事業完成の昭和十二年度には、一千百町歩の鹽田が完成することとなり、鮮内の鹽消費量五億八千萬斤(從來二億八千萬斤を外鹽輸入に仰いでゐる)の四分の一が製出される豫定である。尙八年度以降の經費割當及び擴張鹽田は次の如くである。

初年度 三百町歩(四十萬圓)

二年度 四百町歩(六十二萬圓)

三年度 四百町歩(六十八萬圓)

尙四、五兩年度は二十萬圓宛で、擴張鹽田の仕上げを行ふことゝなつてゐる。(朝鮮)

○朝鮮吉惠線の一部開通と吉州橋竣工

地方民が多年熱望してゐた吉惠線は、十二月一日を以て吉州、載徳間二十六軒四分の營業開始を見るに至り、又永年水禍のため吉州地方民が交通上非常な不便と苦痛を感じてゐた吉州橋が竣工した。(朝鮮所載)

播磨屋九兵衛
右板元よりの申出でを本屋
行司にて開届け板行

天保七年五月十一日

大坂袖鑑 一冊
諸役人名前改正板行申出

登船獨案内 一冊 再板發行申出

四國道路道しるべ 一冊 再板發行申出

天保
新板大坂之圖 一枚摺
原板焼失に付再刻發行申出

大坂方角略圖 一枚摺 一紙 開板發行申出

東
西船路名所記 一冊 附廻船針直路之圖 小川美啓(九之助丁一丁目)

改正日本圖 五采分圖 折本一冊 再板發行申出

渡海便覽 一冊
此度諸大名御船印入(丁數六丁)
増補發行願出

小川美啓(九之助丁一丁目)

大坂全圖 再板發行申出

大坂中圖 一枚摺 再板發行申出

大坂指掌圖 一枚摺 再板發行申出

正本屋利兵衛
右板元よりの申出でを本屋
行司明組にて聞届け板行 天保七年八月五日

藤屋九兵衛
右板元よりの申出でを本屋
行司にて聞届け板行 天保七年十月

天満屋安兵衛
右板元よりの申出でを本屋
行司にて聞届け板行 天保七年十二月

播磨屋九兵衛
右板元よりの申出でを本屋
行司篤組にて聞届け板行 天保八年三月

播磨屋九兵衛
右板元よりの申出でを本屋
行司篤組にて聞届け板行 天保八年四月

秋田屋良介(九之助丁一丁目)
播磨屋九兵衛
右板元よりの申出でを本屋
行司篤組にて聞届け板行 天保八年五月

播磨屋九兵衛
右板元よりの申出でを本屋
行司篤組にて聞届け板行 天保八年七月

秋田屋良介(九之助丁一丁目)

播磨屋九兵衛
右板元よりの申出でを本屋
行司篤組にて聞届け板行 天保八年九月

播磨屋九兵衛
右板元よりの申出でを本屋
行司篤組にて聞届け板行 天保八年十月

播磨屋九兵衛
右板元よりの申出でを本屋
行司篤組にて聞届け板行 天保八年十月

猫間川堀浚繪圖 一枚摺 新板發行申出

大王造繁榮之圖 一枚摺 開板發行申出

扇東西道中圖鑒(宿屋物) 一紙
面板行賣弘申出

歌川景松(江戸)

伊勢參宮道中圖 一枚摺 開板發行申出

灘屋高次郎(權右衛門町)

三十石夜舟便覽 一紙 開板發行申出

日本國々道一覽 一紙 開板發行申出

改攝津大坂之圖 折本 一冊
正舊板に(目印山)を増補發行申出

大河便覽 一帖

高島春松

大坂(大坂)新田細見圖 折本 一冊

松尾華堂(城州伏見)

大坂指掌圖
此度「目標山」を増補發行の旨申出

板元

右板元よりの申出でを本屋
行司慣組にて開届け板行

天保九年二月

正本屋利兵衛
右板元よりの申出でを本屋
行司慣組にて開届け板行

天保九年三月廿日

和泉屋平兵衛(京都)

秋田屋良助
右板元よりの申出でを本屋
行司慣組にて開届け板行

天保九年三月廿日

鹽屋喜兵衛(博勢町)

右板元よりの申出でを本屋
行司慣組にて開届け板行

天保九年閏四月二十日

秋田屋良助

右板元よりの申出でを本屋
行司慣組にて開届け板行

天保九年五月十一日

秋田屋良助

右板元よりの申出でを本屋
行司慣組にて開届け板行

天保九年五月十一日

はりまや九兵衛

右板元よりの申出でを本屋
行司慣組にて開届け板行

天保九年六月五日

播磨屋九兵衛(高麗橋一丁目)

天保九年六月二日

播磨屋九兵衛(高橋橋一丁目)

天保十年十二月十六日

播磨屋九兵衛